

戦前期日本におけるコメニウス言説再考 2

教育学科 相 馬 伸 一

抄 録

本論文は戦前期日本のコメニウスに関する言説の包括的調査の一環である。近代国民国家形成の要因のひとつである国民教育制度が19世紀半ばに成立した際、17世紀チェコの思想家コメニウスは近代教育の祖として紹介された。日本における西洋教育受容に関する知見を深めるには、この過程のより詳細な検討が望まれる。

1945年までに出版された、主として教育関連の書籍や雑誌の調査によって、私は、これまでの調査では触れられていなかった20以上の記事を確認した。本研究では、それらの記事を概説し、コメニウス解釈が変容あるいは多様化した過程を再考する。本稿では、とくに1880年代後半から1890年代にかけて邦訳された教育史、教育学、教授学の教科書、西洋教育の紹介に大きな役割を果たした山縣悌三郎（1859-1940）の活動、そして1895年までに現れた記事や書籍をあつかう。

Key Words：コメニウス、西洋教育受容、教育思想史、メタヒストリー

はじめに

本稿は、『佛教大学教育学部論集』第31号（2020年2月）所収の拙稿「戦前期日本におけるコメニウス言説再考」の続編である。

17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・コメニウス（Johannes Amos Comenius, 1592-1670. チェコ語表記では、ヤン・アモス・コメンスキー（Jan Amos Komenský））は、教育以外でも神学・哲学・自然学・歴史・文学・言語・政治等にわたって重要な事績を残している。しかし、欧米各国で国民教育制度が成立した19世紀、教員養成の教科書として書かれた教育史（教育思想史）において近代的な教育の先駆者として記述され、コメニウスは日本では

もっぱら教育家としてあつかわれてきた。ここには、歴史が書かれるのにもなう歴史的問題、いわばメタヒストリーの問題がある。本研究は、明治からおおよそ1945年までに発行された書籍や雑誌記事に現れたコメニウスに関する言説を現れた順に再構成し、調べがついた限りで概要等を付して若干の考察を加えるものである。井ノ口淳三氏（追手門学院大学名誉教授）によって日本教育学学会紀要『教育学研究』第44巻第3号（1977年）、『追手門学院大学人間学部紀要』第8号（1999年）及び日本コメニウス研究会年報『日本のコメニウス』（第1号、1991年～第20号、2010年）に発表された目録に未収録の論考については「＊」を付す。また、教育史（教育思想史）の通史テクス

トのように、コメニウスを中心的にあつかっていないもののうちで紹介に値すると考えられるものは「番外」としてあつかう。

創立期の千葉教育会とその周辺

前稿では、『千葉教育会雑誌』に現れた「コメニウス氏畧傳」にとくに注目した。千葉教育会は、1881年の東京教育会の結成に次いで全国でも早くに現れた地方教育会であった。『千葉教育会雑誌』に先立つ千葉教育会の機関誌として『培根社雑誌』があり、この編纂にあたったのが、1877年に東京師範学校を卒業して千葉県師範学校に赴任した辻敬之（生年調べつかず-1892）である。辻はのちに多くの教育書を送り出す普及舎や開発社を興した。開発社は、49年にわたって続いた最初の商業的な教育雑誌『教育時論』を発行したが、そこにかかわった人物として、辻のほかには、地理や算数の教科書編纂で知られ、辻のあとをうけて社長となった岡村増太郎（生没年の調べつかず）、岡村のあとを受け、『教育学史』等を著し、筆禍事件で責めを負ったエピソードのある西村正三郎（1861-1896）[林 1968：143-145]、文部省編輯局で国語教科書の編纂に携わり、東宮御用掛、ドイツ留学を経て、のちに社長を長く務めた湯本武比古（1856-1925）らがいる⁽¹⁾。

「賢哲畧傳」の執筆に関わったのは誰なのだろうか。この連載がベスタロッツ主義教育の歴史的・思想的背景に関するものであることからすると、若林虎三郎、白井毅、山縣悌三郎あたりが候補にあがる。伊澤や高嶺自身であった可能性もあるし、『如氏教育学』を訳し、当時はまだ東京帝国大学文学部を卒業したばかりの有賀長雄（1860-1921）であった可能性も否定できない。また、「賢哲畧傳」にアガシーがとりあげられていることからすれば、アガシーを紹介した能勢榮の可能性もあるだろう。

本稿で紹介するように、明治前期にコメニウ

スを含めた西洋教育家の紹介を活発に行ったのは山縣である。彼の自伝によれば、1878年に『内外教育新報』に寄稿したのが「余の原稿の印刷に附せられたる始」[山縣 1987：71]とあり、1882年にコメニウスについて書いていても不思議はない。「賢哲畧傳」のアガシーの項には、彼が卓越した板書能力を有していたことが書かれているが、山縣は、お雇い外国人教師で著名な動物学者であるエドワード・モース（Edward Sylvester Morse, 1838-1925）の講演会に参加し、「五色のチョークにて説明のために描かる禽獣虫魚などは、実に巧妙を極めたるもの」とその板書能力に感嘆した半面、「自ら省みて図画の極めて拙劣なるに想ひ到り、大いに前途を悲観するに至った」とわざわざ記している[山縣 1987：74]。東京師範学校に学んだ山縣は博物学を専攻していた。しかし、のちに現れる山縣のコメニウス紹介には、『千葉教育会雑誌』に書かれているプシェロフにおけるコメニウス像の序幕等のエピソードは引かれていない。彼が著者であれば、のちにコメニウスについて書いた際には多少とも前稿を参照するだろう。この論考が出た年、彼は、宮城師範学校の改革に失敗して東京に戻り、文部省の編輯局長であった西村茂樹の声掛けりで博物学の教科書編纂の委嘱を受けた。しかし、原稿料が入るまでの生活の糧を得るために、愛媛県師範学校に教頭として赴任している[同：94]。

1889年にアメリカに留学した西村は、のちに講義『教育学史』（敬業社、1897年）を出版し、そこでコメニウスにも触れているが、出身をポーランドとしており、『千葉教育会雑誌』のような濃密な記述をする者がそうした誤りをするのも考えにくい。

また、「賢哲畧傳」のアリストテレスの回の末尾に「(尾)」とあったことを頼りに氏名に「尾」がある人物を『教育関係雑誌目次集成』の巻末索引から探したが、「尾」や「大尾」は、

「終」や「完」と同様に記事や著作の終結を示すのにも用いられており、著者名とはおそらく無関係であると思われる⁽²⁾。

さらに、千葉教育会の前身である培根社に手掛かりはないかと考えた。『培根社雑誌』の目次に該当するページのコピーを国立国会図書館に依頼したが、同誌の表紙の体裁は各巻の内容を把握できないようなもので、かなりの費用をかけて改めて各巻の主要な記事を入手して精査した。しかし、これはと思える手掛かりは得られなかった。『培根社雑誌』には入社した者の氏名や所属が掲載されているが、そのなかにもとくに目を引く人物はいなかった。

明治前期の翻訳教育史におけるコメニウス（番外）

教育史（教育思想史）は、19世紀における欧米各国での国民教育制度の成立と並行して書かれるようになったが、多くのテキストのネタ本ともいえるべきものは、前稿で触れたように、ドイツのラウマーの浩瀚な『教育学史』であった。近代化をスタートさせた日本で翻訳出版されたのは、ラウマーの『教育学史』の影響を受け、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランスで書かれたものだった。日本で最初に翻訳された教育史テキストは、前稿で触れた、

・ヒロビブリアス、西村茂樹訳、『教育史』上・下、文部省、1875年2月、上巻191頁、下巻177頁。

原著：Linus Pierpont Brockett (1820-1893), *History and Progress of Education, from the earliest times to the present: intended as a manual for teachers and students by Philobiblius*, New York: A.S. Barnes & Burr, 1860.

であった。国立国会図書館の蔵書目録によれば、その後、1886年から1892年にかけて、次の6つのテキストの7種類の翻訳が現れている。・國府寺新作講述、『獨乙聯邦普魯西國教育新史』、博文堂、1886年12月。

原著：James Donaldson (1831-1915), *Lectures on the History of Education in Prussia & England*, Edinburgh: Adam and Charles Black, 1874.

教育制度の成立にページが割かれており、翻訳ではイングランド関係は割愛されている。

・クレッペル、鈴木力訳、『教育哲学史』前・後、博文堂、東京、1886年12月、1888年3月、前編190頁、後編185頁。

原著：Clemens Klöpper (1847-1913), *Repetitorium der Geschichte der Pädagogik von Denältesten Zeiten Bis Auf Die Gegenwart*, Rostock: W. Werther, 1891.

前稿で示したように、日本で最初にコメニウスの『世界図絵』の挿絵が紹介された例と考えられる。

・ブラウイング、杉浦重剛訳、『教育原論沿革史』、金港堂出版、東京、1887年6月、493頁。

・ブロウニング、山本義明訳、『教育学説史』、牧野書房、東京、1887年7月、431頁。

原著：Oscar Browning (1837-1923), *An Introduction to the History of Educational Theories*, London: Kegan Paul Trench, 1881.

ブラウニングは、ラウマーの業績を踏まえつつ、前稿で触れたクイックとも連携しながら、教育思想を分類する視点を提示し、その影響は長く及んだ。出版当時にそれだけの評価が広まっていたとは思えないが、同年の1ヵ月の間に2種類の翻訳が現れている。

・ベンネット、山縣悌三郎訳、『教育哲学史』、普及舎、東京、1887年10月、71頁。

原著：Charles Wesley Bennett (1828-1891), *History of the Philosophy of Pedagogics*, New York: E. Steiger, 1877.

訳者が指摘するように、ベネットの神学者としてのスタンスが濃厚な内容だが、西洋近世の教育思想史としては理解しやすい構成になっている。

・ペインター、杉浦重剛訳、『教育全史』、普及

舎，東京，1887年10月，691頁。

原著：Franklin Verzelius Newton Painter (1852-1931), *A History of Education*, D. Appleton and Company, New York, 1886.

アメリカの著名な教育者ウィリアム・ハリス（William Torrey Harris, 1835-1909）による「国際教育シリーズ」（International Education Series）の第2巻。ちなみに，第1巻はヘーゲル主義教育学者ローゼン克蘭ツ（Johann Karl Friedrich Rosenkranz, 1805-1879）の『教育哲学』であった。ペインターは，ヘーゲル主義的な叙述を徹底したドイツのカール・シュミット（Karl Schmidt, 1819-1864）の影響を受けたと明言している。

・ガーブライエル・コンペール，松島剛，橋本武重訳，『教育史』，上・下，普及舎，東京，1892年7月，994頁。

原著：Gabriel Compayré (1843-1913), *History of Pedagogy*, translated, with an introduction, notes, and an index, by W.H. Payne, W. Swan Sonnenschein & Co., London, 1888.

コンペールが著した *Histoire de la pédagogie*, Paris, 1880. をウィリアム・ペインが英訳したものの重訳である。人物の選択と配列は，ラウマーの『教育学史』とはかなり異なる。

これらの出版ののち，明治期にさらに4点の翻訳が現れているが，それらは次稿以下であつかう。これらの教科書は専門的記述というわけではないが，要約的・説明的な記述の影響は無視するべきではない。ドナルドソンのテキストは教育制度を中心に記述されているので除外し，ここではプロケット，クレッペル，ブラウニング，ベネット，ペインター，コンペールのテキストの記述を比較しておこう。

生没年は，当時のテキストに共通して，1592年生誕，死去は1670年ではなく1671年となっている。生誕地については，コムニャとしているのがプロケット，クレッペルで，ニヴニツェ

としているのがブラウニングであり，コメニウスはコメンスキーとも呼ばれるとも書いている。

生涯のエピソードについては，力点の置き方に相違がある。プロケットとベネットは，テキスト自体が短く，伝記的記述も少ない。コンペールは教育説の紹介に重きを置いているが，生涯に20回所を変え，20冊の著書を物したという記述は正確とはいえない。クレッペルは，コメニウスがポーランドからオランダに避難した経路を詳細に紹介しているが，当時の宗教対立を背景にした戦乱には触れていない。ブラウニングは，イギリス人らしく，コメニウスのイギリス訪問については相当のスペースをあてている。のちにミルトンをあつかう際にもコメニウスの影響を論じている。また，ハンガリーでの教育実践についての記述も詳しい。ペインターは，三十年戦争やその背景の宗教対立も説明し，コメニウスがポーランドに亡命する際の情景なども描いているほか，スウェーデンからの招聘の経緯を詳しく書いている。

影響を受けた人物についての記述では，まずベーコン，次いでラートケ，その他，アルシュテット，ボジン，アンドレーエらがあげられている。とくに，コンペールは，ベーコンによる科学研究の革新にページを割き，コメニウスはそれを教育分野に応用した人物として位置づけている。コメニウスの『大教授学』（*Didagtica Magna*）はベーコンの『大革新』（*Instauratio Magna*）を意識したものではないかと記し，さらにはフランスの歴史家ミシュレがコメニウスを教育界のガリレオと評したのをうけて，教育界のベーコンと位置づける。プロケットやペインターもベーコンの影響を書いているが，コンペールの比ではない。クレッペルは，ベーコンを特筆せず，コメニウスが青年時代の修学期に直接間接に学んだアルシュテット，ボジン，アンドレーエをあげている。

コメニウスの著作としては、『開かれた言語の扉』、『大教授学』、『世界図絵』が中心なのは自然なことだが、ここにもテキストによる異なりがある。プロケットの記述は長いものではないが、コメニウスが『前庭』、『扉』、『広間』といった難易度に差をつけた教科書を創案したことに触れている。プロケットのほかにこの点に触れていたのはクレッペルとブラウニングだが、クレッペルは、コメニウスが『前庭』と『広間』のあとに、パンソフィア、パンヒストリア、神学通論を学ばせるように考えていたと記している。前稿で立ち入って考察したパンドグマティアはクレッペルの原著ではallgemeine Dogmatikとなっており、これが「神学通論」と訳されたのだろう。コメニウスは、dogmaではなくphilologyという語もあてており、神学というよりは文献学のニュアンスが強いと思われる。

『開かれた言語の扉』がヨーロッパの12言語のほかアジアの言語にも訳されたというエピソードは、プロケット、クレッペル、ブラウニング、ペインターが書いている。ブラウニングの杉浦訳では、表題が『語学啓蒙』とされている。

『世界図絵』については、教科書に挿絵を取り入れた画期的な創案であることはほとんどのテキストで触れられている。プロケットは、「学校の課業の定本」になり、200年以上も普及したと書いている。クレッペルは、コメニウスがハンガリーにいた1650年には著されており、改訂が加えられて広く普及したことを説明し、1746年版を例にとって説明を加え、さらにガイラー（Jacob Eberhard Geiler, 1792-1850）による『新・世界図絵』（*Neuer Orbis pictus*）についても触れている。コンペルは、『世界図絵』の冒頭で動物の挿絵と鳴き声の解説から発音を学ばせようという試みがなされているのを評価している。ちなみにコンペルの日本語訳で

は、表題は『実物易解』とされている。

多くのテキストが『大教授学』からコメニウスの教育説を要約しているが、最初はチェコ語で著され、のちにラテン語に訳されたという経緯を丁寧に紹介しているのはクレッペルである。『大教授学』にとくに強調を置いたのはコンペルで、ロックの『教育に関する考察』やルソーの『エミール』を引き合いに出し、いわば教育学の古典として位置づけている。他方でコンペルは、コメニウスの著作のうち「教育家の注意を惹くに足るべき者はただ二三に過ぎず」として、宗教的・形而上学的著作はとりあげなかった。

この他のコメニウスの著作としては、プロケット、クレッペル、ペインターが『言語の最新の方法』を紹介している。ブラウニングは、コメニウスが1616年にはすでにラテン語学習に関する著作を物していることや、イギリス訪問後に『開かれた言語の扉』にかなりの改訂が加えられたことにも言及している。

教育説の紹介は、概して『大教授学』の内容の要約となっている。現世を来世への準備としてとらえる目的論、男女に同一の教育を施すべきこと、感覚を重視した事物をとおした教育、適時性・段階性を踏まえた内的自然を重視する教育、敏速・愉快・着実といった原則、練習を重視する一方で暴力的手段を避けること、四段階の学校論等が、テキストによって濃淡があるものの紹介されている。ブラウニングは、コメニウスの心理学的見解には問題があったと指摘する一方で、『大教授学』の章立てに沿った説明にページを割き、コメニウスは学校改革が緒に就けば学校は「人物製造場」となると考えていたと書いている。コンペルは、コメニウスが幼時からの抽象的な知的概念の教育を重視したこと、事物をとおした教育を強調したこと、語学教授の簡略化を進めたことを高く評価し、丁寧に説明している。ベネットのテキストでは、

ほとんどが『大教授学』の要点の解説になっている。

コメニウスの歴史的な位置づけという点では、クレッペルのものはドイツで用いられたこともあって、最初の義務教育令が布かれたゴータ公国での教育改革への影響に言及されている。とくに重要なのがブラウニングで、ラウマーやシュミットが教育思想の分類に用い始めたと思われるリアリズムという用語を積極的に導入し、コメニウスはラートケとともにリアリストとして位置づけられた。杉浦の日本語訳では、誤解を招きやすい「実学論者」とされた。コンペルは、前述のようにベーコンからの影響を重視してコメニウスの教育思想の科学性を強調したが、プロテスタント側の教育改革の一環と見なしている。

渡辺嘉重、『欧米大家教育格言』（金松堂、1887年1月。）番外

既述のように、教育家の格言を集成した書の最初期のものと思われる。前稿で触れたように、原著が何であったのか確認がとれていない。西洋の人物が25名とりあげられ、コメニウスに関しては、「学校は人間の製造場なり」、「事物と言語とは同時に学ばざるべからず。しかれどもその主として学ぶものは事物なり。何となれば事物は知力及び言語の目的たればなり」、「言語と知識とはその進歩を同じうするを要す」、「学校にして校戒なきは水車にして水なきが如し」、「来たれ汝とともに郊野に逍遥せん」等のコメニウスの『大教授学』、『世界図絵』の一節が10紹介されている。

山縣悌三郎、「コメニウス氏教育説一斑」（『教育時論』、開発社、第29号、1887年11月。）＊

この論考では、『大教授学』に示されている植物にアナロジーをとった自然性の重視（用語は自然ではなく天然）、易から難へという教育

の順次性、教授の計画性、父母や教師と児童の関係の重要性、文字ばかりではなく実物をととした教育の重要性が概説されている。

著者の山縣は、クイックの『教育改革家』を参照したと書いている。クイックはケンブリッジ大学に学び、後年そこで初めての教育史講義を行った。ホイッグ史観に立つ彼のスタイルは他の教育史作家に大きな影響を与えた。山縣はクイックの考察を要約し、モンテーニュ、ベーコン、ミルトンらに哲学理論は見られるものの、その教育への応用はなく、その後、アスカムやラートケが教授法を考察したが、コメニウスは「前者の学と後者の術を総該し、天然の真法に基づきて万世不易の道を求めたり」として高く評価した。

この論考では、教育の計画性の説明で「一旦修めし事物もこれを中止転移せば…ついにその功を成すの期けなければなり」、「なお鉄を鍛錬するが如し」として、訓練の必要性が強調されたり、教師の姿勢については、「児童に接するに懇切なること慈母の如く、整肅なること嚴父の如く」と『大教授学』が必ずしも主題的に論じてはいない日本的・儒教的な説明も見られる。

松山の中学校にいた山縣は、そこを訪れた西村茂樹の推挙により文部省御用掛として教科書編纂に携わった。しかし、その後に公職に就く機会は得られず、1886年に下野したのちは教育雑誌『学海之指針』や児童雑誌『少年園』の刊行に関わるなど民間で活動した。『学海之指針』は1872年にアメリカで創刊された *Popular Science Monthly* のから着想を得たものだという〔石田 1935：3〕。『少年園』も少年向け雑誌の嚆矢とされている。後年は、末弟で英文学者・ジャーナリストの山縣五十雄（1869-1959）が英字新聞「セウル・プレス」に関わったこともあり、朝鮮半島にわたり、梨花女子専門学校教授も務めた。彼は、明治前期に多くの雑誌に

寄稿したほか、ダーウィンの学説紹介、サミュエル・スマイルズの『自助論』の翻訳など、西洋思想の受容に相当の足跡を残した。

山縣悌三郎、「教育家論評、其一 コメニウス氏」（『教師之友』、東京教育社、第7号、1887年12月。）＊

同誌の巻頭には山縣の肖像が掲載されている（図1.）。27ページに及ぶ長編の紹介であり、コメニウスをイギリスに招いた盟友のサミュエル・ハートリブ（Samuel Harlib, 1600-1662）の活動に触れているほか、コメニウスが晩年にアムステルダムに移ってのち、予言信仰に傾倒し、『闇のなかの光』（*Lux in tenebris*）等の書によって多くの論争を引き起こしたことも言及されている。また、コメニウスが『開かれた言語の扉』を著す際にイエズス会のアイルランド教団に所属したウィリアム・ベイズ（ラテン語

表記ではバテウス, William Bathe, 1564-1614)の影響を受けたことや各国語の対訳版が出版されていた経緯も、出版年の誤りやパーコンが激賞したといった事実誤認があるにしても、相当に詳細である。ハートリブの依頼によってミルトンが著した教育論でコメニウスについて言及されていることも書かれている。

思想・学説の紹介は、主として『大教授学』の内容に依拠しつつ、コメニウスを勃興した哲学を教育の実地に初めて応用した人物として描いている。「イエズス派はまったく文学的の教示」であったのに対し、「コメニウス氏は幼児の教育よりして、まず実物について指教した」「実物指教の教授法を創せる一人」とであると評価されている。『世界図絵』が「百有余年にわたり、久しく各小学校の教科書に用いられた」という記述は正確を欠くが、『世界図絵』の影響力を強調した点は理解できる。その他、実践に役立てるとする観点からか、父母のとりべき態度、教師のとりべき態度、学校建築、発問の基本、教授法、試験といった項目を立てて、『大教授学』の内容を整理した記述も見られる。そして、次のカッコ書きの記述からは、山縣が『世界図絵』を実際に手にとり、それに魅せられたことがわかる。

「予かつてこの書を田中芳男君より借覧せり、書中載するところの事項は老生童年の両者に適し、各項その要領を摘記し、每章小図画を挿み、その下に数字を付し、これに合して別に解釈を施せる表を加う。その記事中第17世紀の風俗習慣等に係るもの多きをもって、実に歴史上考徴の一大利益ありとす。予は今ここに精巧なる図画を提示し、その顕著の例文を示す能はざるを遺憾とするのみ。」

東京師範学校で山縣が博物学を専攻したひとつのきっかけを作ったのが、ここで『世界図絵』を借り受けたと書いている田中芳男（1838-1916）であった。田中は、蘭方医の家に生ま



図1. 『教師之友』第7号の口絵
（同志社大学人文科学研究所蔵）

れ、幕末から明治期にわたって博物学者として活躍し、博物館という名称の生みの親でもある。山縣は、田中の「動物訓蒙、有用動物学等を読みてすこぶるその人に傾倒し、何人の紹介もなく」訪問し、師事することになったと書いている〔山縣 1987：70〕。この言及は、明治以降に限っても1887年以前には日本に『世界図絵』が入っていたことを示している。田中がどのような経緯で『世界図絵』のどの版を入手したのかなど、興味は尽きないところである。

田中は、文部省発行の『泰西訓蒙図解』（上下、1872年）の訳者でもあり、1873年のウィーン万国博覧会に派遣されている。田中の旧蔵書の一部は関東大震災からの復興のために東京大学附属図書館（総合図書館）に寄贈された。そこで同図書館に照会したが、『田中美津男男爵寄贈圖書目録』には『世界図絵』（*Orbis sensualium pictus*）の記載はないとのことであった。しかし、田中の蔵書は国立科学博物館や東京国立博物館にも収蔵があるとの示唆を得た。そこで両博物館にも照会した。しかし、残念ながら、国立科学博物館には所蔵がなく、東京国立博物館でも「田中芳男献納書籍」や『明治13年列品録』（館史367、マイクロフィルムNo.1239）にも該当するものはないとの回答であった。最後に、田中の出身地である長野県の飯田市美術博物館に照会したが、田中の子孫から同館に寄贈された物品のなかには古書はないとのことであった。

ともあれ、西洋教育思想の受容という点でも山縣の存在は大きく、再評価が必要であろう。ジョセフ・ペインの *Pestalozzi: The Influence of His Principles and Practice on Elementary Education*, New York: E.Steiger, 1877. をもとに普及舎の教育叢書として1887年に出版された『ペスタロッチ氏の主義及応用』は、おそらく日本で最初にペスタロッチを紹介した単著である。この翌年に山縣が自ら興した『学海之指

針』には、「教育小説 劣夫傑女譚」と題されたペスタロッチの『リーンハルトとゲルトルト』の連載や「エミール論」の連載も見られる。山縣は、1887年に普及舎の教育叢書から『フレーヴェル氏小伝及幼稚園』も出版している。内容からして、これはペインの講演録 *Lectures on the Science and Art of Education* によるものと判断される。同じタイトルの講演録には複数の版があるが、山縣が訳出したペインの講演 *Froebel and the Kindergarten System of Education* は1874年2月にロンドンで行われたもので、調査できた範囲では、1885年以降の版に収録されている。1885年版が底本としても、山縣は原著の出版後わずか2年で訳書を出したことになる。

さらに、山縣がコメニウスについての単著を物した可能性がある。山縣の自伝に付せられた荻野富士夫による解説「山縣悌三郎小論」には次のように書かれている。

「山縣は1886（明治19）年、まず教育叢書を企画し、ついで『理科仙郷』全10巻を刊行する。前者は、『教授之得失』『教育哲学史』『習慣論』『ペスタロッチ氏の主義及応用』『フレーヴェル氏小伝及幼稚園』『コメニウス氏伝及び教育説』などであり、合わせて『進化要論』『男女淘汰論』という進化論関係の著作もものする。」〔荻野 1987：199〕

この文を眼にしたとき、決して大袈裟ではなく、いささか胸の鼓動が高鳴るのを覚えた。国立国会図書館サーチでは、普及舎の教育叢書として、『教授之得失』、『教育哲学史』、『ペスタロッチ氏の主義及応用』、『フレーヴェル氏小伝及幼稚園』は確認でき、すべてデジタルコレクションにも収められている。しかし、『習慣論』と『コメニウス氏伝及び教育説』はインターネット上では所蔵を確認できず、1894年刊の『普及舎発刊書 分類彙纂』にも見えない。古書店のインターネットサイト「日本の古本屋」

でもあがってこない。今回の調査の対象にした書籍や雑誌類の巻頭巻末に掲載の出版社の広告等もできるだけ目を通すようにしたが、見当たらなかった。たとえば、『東京茗溪会雑誌』の第58号（1887年11月）の巻末の広告（図2.）にも『教育時論』の第100号（1888年1月）の巻末（図3.）にも現存が確認されている4書しかとりあげられていない。

山縣自身は自伝で1886年「10月教育叢書の第1巻『教授之得失』を著訳」し、1888年に

「教育叢書の第2巻『教育哲学史』、第3巻『ペスタロッチ氏の主義及応用』、第4巻『フレーベル氏及幼稚園』を訳出す」〔山縣 1987：111, 117〕と書いているが、2著については言及していない。荻野氏が小伝で言及している山縣についてのいくつかの論稿も入手して確認したが、コメニウスに関する著作についての言及はなかった。ここまでしたうえでであれば多少の失礼も許されようということで、小樽商科大学に連絡し、同大学を定年退職されていた荻野氏への連絡の仲介を依頼した。同大学総務課は趣旨を理解して連絡をとってくださり、荻野氏は一面識もない私にお返事を下さり、手を尽くしてくださった。しかし、残念ながら手掛かりは得られなかった。

日本で最初のコメニウスについての単著は、これまで真田幸憲が1904年に出版した『近世教育の母コメニウス』であると考えられてきた。もしも『コメニウス氏伝及び教育説』が出版されていたとすると、書き換えが必要になる。インターネットが万能なような昨今でも、収録されていない書誌はあるし、どこかに死蔵されている可能性もある。

他方、この著作が幻だった可能性もある。山縣に限らず、「これこれの本を出します」と公表しておいて計画が変更になったり頓挫したりすることは珍しいことではない。近刊予告等が出たものの、2著の企画が出ずじまいになったことも考えられる。もしそうだった場合、この『教師之友』の異例に長い記事が幻のコメニウス論だった可能性も考えられる。山縣のもとにコメニウスについて執筆するための複数のリソースがあったことは明らかで、先に見た、『世界図絵』を図入りで紹介できないことを惜しんだ記述は、単著で出す予定が変わったことを含意しているかもしれない。教育叢書のもう1冊としてあげられている『習慣論』についても、山縣は、『東京茗溪会雑誌』の第61, 62, 75号

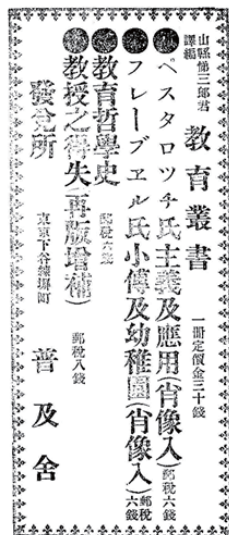


図2. 『東京茗溪会雑誌』第58号の広告

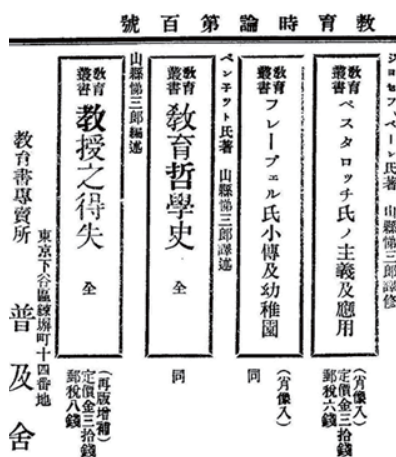


図3. 『教育時論』第100号の広告

（明治21年～22年）に「羅氏習慣教育論」と題して連載している。また、普及舎の教育叢書として出版されたベネットの『教育哲学史』は『教師之友』に掲載されてから出版されている。

この研究で明治期の多くの教育雑誌を調査しているが、『教師之友』は、英文や漢文のテキストも含まれ、きわめてレベルの高い雑誌といえる。

「村夫子随筆」（『教育』、学海指針社、第24号、1889年6月。）＊

山縣が興した学海指針社の雑誌に現れたごく短い一編。「村夫子」は著者のペンネームであると思われ、この雑誌のほか『日本教育』、『内外教育評論』に寄稿が見られるが、実名はわからない。コメニウスの『大教授学』の一節、「天の太陽は吾等の教訓の最も善良なる模範を示せり、即ち太陽は成長を遂げんとする活物に向かい、（第一）日々光と温とを附し、（第二）時々雨と風とを恵み、（第三）稀れに必要な感ずる時は雷電を以てす」が引かれている。この一節は、昭和期の師範学校教育科教科書などで、軟教育一辺倒ではならず硬教育的な手段も認められる場合があるという主張がなされる際に、引用された〔相馬 2018: 153〕。こののち、ペスタロッチの『リーニハルトとゲルトルート』が引かれている。執筆者は山縣自身の可能性が高いのではないだろうか。

「『コメニウス』氏の生徒分類」（『教育評論』、教育評論社、第13号、1889年9月。）＊

著者名は記されていない。コメニウスは、『大教授学』の第12章18節から24節で、知能には、鋭いか鈍いか、柔軟か堅固か、知的か活動的かという3つの軸があり、そこから6つのタイプが想定されると書き、しかし、方法上の工夫によって教育は可能であると強調した（3つの対立軸を組み合わせれば8つのパターンが

考えられるはずだが、コメニウスは6つしかあげていない）。ここでは、子どもの知能を怜悯順良、従順、頑固執拗、遅緩、愚鈍怠惰、通常喪念と6種に見ていたとし、それらに応じた関わりについて簡潔にまとめられている。

こののち「習慣の養成に関する諸大家の説」という項目が続き、ルソーの『エミール』やドイツの神学者で教育学者のヘルマン・ニーマイヤー（Hermann Niemeyer, 1754-1828）の所見が引かれており、ひと続きの内容として書かれたと思われる。

遼豕生、「コメニアスの傳」（『千葉教育会雑誌』、第132号、1889年10月。）＊

冒頭にペインターの『教育史』より摘訳とある。『開かれた言語の扉』の出版経緯が詳細に紹介されているが、この論考は「未完」とされたまま後続の雑誌には続編が見当たらない。著者名は「遼東の豕」の故事からとられたペンネームと思われるが、詳細はわからない。『千葉教育会雑誌』第8、9、10号掲載の「コメニアス氏畧傳」とは内容が明らかに異なっており、関連は認められない。

『倫氏教育学』の影響（番外）

この時期、コメニウスの自然観の「通説」となる書物が現れている。チェコ（当時はオーストリア＝ハンガリー帝国）の教育学者グスタフ・アドルフ・リンドネル（Gustav Adolf Lindner, 1828-1887）の『麟氏教授学』あるいは『倫氏教育学』である。この点は、すでに拙著『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀』で言及しているが、本稿を通史的に書いている関係上、やや重複になるが再説しておく。

日本における教育近代化は、まずペスタロッチ主義のアメリカ経由での導入から始まったが、近代化のモデルがドイツへの重心移動するなかで、ドイツ語圏で圧倒的な影響力をもちつ

つあったヘルバルト派教育学が導入された。ヘルバルト派教育学者としてはラインやツィラーがよく知られるが、その著作が日本語を含む7カ国語にも翻訳されたのがリンドネルであった。

リンドネルの著書は、『麟氏教授学』（有賀長雄訳、牧野善兵衛発行）としてすでに1887年に現れている。さらにこれとは別に東京音楽学校及び東京女子高等師範学校校長を務めた湯原元一（1863-1931）の翻訳による『倫氏教授学』（金港堂書籍）が1893年、『倫氏教授学』（金港堂書籍）が1896年に出版された。

前稿でも参照したが、リンドネルは、コメニウスの伝記を付して『大教授学』のドイツ語訳を出版している。リンドネルの邦訳著作におけるコメニウスへの言及は、次に見るように断片的だが、少なからぬ影響を与えたと思われる。

「ルソーの教義のコメニウスの教義といささか異なる点は、ルソーは、内界の自然を主とし、コメニウスは、外界の自然を主とするにあり。」（『倫氏教育学』）

「コメニウスがいわゆる合自然主義は、教授の作用と自然の営為とは同一轍に出づべきものとすにあり。氏はこれをもって、その教授論の最高主義となして、細かにこれを敷衍せり。氏は自然の中において教授の規則として適用すべき模範を求め、人間外の自然と人間の発達との相一致符合するところを取り、これをもって教授の方針を示すものと定めたり。」（『倫氏教授学』）

「教授の歴史を按ずるに、コメニウス及びペスタロッチはむしろ理想の方向を代表し、これに反してロックとバゼドウはむしろ実地の方向を代表するものなり。しかして現今の状態は、理想の方向よりもむしろ多く実地の方向に向かうがごとし。」（同書）

「今日の小学教育を創建せる二大偉人をコメニウス及びペスタロッチの二氏とす。二氏につ

き、前者は主として教授の客観的側面、後者はおもにその主観的側面を代表す。詳言すれば、前者は人間を知識の方面に向って陶冶し、後者はこれを実力の方面に向って陶冶せんことを主張せり。したがってコメニウスが主として注目せしは、実質的諸学科にしてペスタロッチが主として注目せしは形式的諸学科なりき。すなわち彼〔引用者注、コメニウス〕にありては教授の目的は知識の実質的增加にして、これ〔同、ペスタロッチ〕にありては心意及び技能の形式的発達なりしなり。西洋中古の教育は、僅少なる知識の材料を授け、主として演説法、論理法（三段論法）等を研究して、心意の形式的陶冶を事とせり。しかるに、今日に至りては、博物諸学科の進歩とともに普通教育もあまたの事実根拠する実質陶冶を施す傾向を有するに至れり。」（『倫氏教授学』）

リンドネルは、ルソーらを主観的自然主義者とした一方で、コメニウスを客観的自然主義者と位置づけた。こうした位置づけから、人間の内的自然を重視したペスタロッチが知識の獲得よりも知識の獲得の過程で形成される心的能力を重視する形式陶冶論者として位置づけられたのに対して、コメニウスは知識の教え込みを重視する実質陶冶論者と見なされることになった。

こうした見方は、日本の教育学者に広く受け入れられていった。湯原とともに、お雇い外国人教師エミール・ハウスクネヒト（Emil Paul Karl Heinrich Hausknecht, 1853-1927）からヘルバルト派教育学を学んだ谷本富（1867-1946）が、1894年に著した『実用教育学及教授法』（六盟館）は相当に普及した啓蒙書だが、コメニウスに関して、「モンテーニュ、ペスタロッチの比にもあらず、直にヘルバルトに相接して、真に科学的教育の遠祖と称するに足れり」といった高い評価も示されているものの、他方で「中世耶蘇教育の旧臭を脱せず」と批判

し、そのままでは「科学的教育学と称するとは未たし」としている。こうした批判の根拠として、谷本は、コメニウスがペスタロッチのように「外界自然の顕象理法に準拠することを求めずして、内界自然の理法に則らむと力め」なかったという。これがリンドネルの評価を受けたものであることは明らかだ。

前稿からの考察で見てきたように、ペスタロッチ主義導入時にはコメニウスは直観教授法の遠祖として評価されていた。しかし、ヘルバルト主義教育学が地歩を占めるとともに、その自然観は教育思想史的には過去のものと見なされるようになった。直観教授法の遠祖という地位は維持しながらも、コメニウスは一段低い評価に格下げされたといえるかもしれない。

竹村鍛，「コメニウスの語学教授論一斑」（『私立兵庫教育会雑誌』，第47号，1893年7月。）＊

冒頭で英米独仏と西洋思想の流行がめまぐるしく変化し国粋思想も現れる状況に触れ、古典的な思想の意義を強調するところから説き起こし、コメニウスの意義を強調している。没年は1671年とされているが、本名はコメンスキーであり、学者としての通用のためにラテン風にコメニウスと名乗ったと書かれている。とくに語学教授に焦点を絞って考察すると断ったうえで、手段的（方便的）言語観、母語の優先、事物と言語の並行的学習、発達への配慮、音読の重視、文法に対する会話の重視、方法の統一といった諸原則を手際よく紹介している。末尾には、「ドイツにては有名なる学者相集りてコメニウス会なるものを組織して精細に氏の学説を討究しつつあり」と、この記事が書かれる前年に結成されたドイツのコメニウス協会について言及されている。

竹村鍛（1866-1901）は黄塔とも号した明治の教育者で、河東碧梧桐の兄であり、正岡子規

とも親交があった。神戸師範学校で教鞭をとり、そののち東京の富山房で漢文の学習書などの編集に携わった。女子高等師範学校教授となるが、若くして死去した。

本荘太一郎編，『教育古典』（普通教育全書第13編，博文館，1894年1月。）

当時、イギリス、フランス、アメリカ、イギリスの浩瀚な教育史著作の翻訳が出版されていたが、本書の序言では、限られた紙数に多くの内容を盛り込むことで生じる無理が指摘されている。また、当時現れていた心理学説に右往左往する風潮も批判され、長い命脈を得ている古典の熟読が勧められている。そして、コメニウスの『教授大学』（『大教授学』）には、「今日実施せる教授の方法中また各学派において、最貴重するところの教授原理中、之を発見する」だけの深みがあるとしている。「今この二氏を合して一冊となし、一はもって教授に関し一はもって教育に関する真理の全班をわずかに二部の書につきて玩味せしめんとせり」として、教授の原理を説いた代表者として第1編でコメニウス、教育の原理を説いた代表者として第2編でヘルバルトがとりあげられている。なお、この他に勧められる西洋教育の古典としては、カントの『教育学講義』、ペスタロッチの『ゲルトルート児童教育法』、ロックの『教育に関する考察』、ルソーの『エミール』があげられている。

コメニウスには、全223頁中の117頁があげられ、生涯や教授原理の解説も相当に詳細である。結論では、コメニウスが教授を印刷術にたとえたのは、「当時学校の恵に預からざる多数の人をして真実の教授を受くるを」可能にするものであり、教師が「性来教授の事業に堪能ならざるものも、精確なる教授術を遵守する」ことで実をあげようとするものであったとされている。

本莊太郎(1863-1927)は、文部省の第2回教員検定試験に合格後、東京帝国大学特約生としてお雇い外国人教師ハウスクネヒトに学び、東京府師範学校、東京尋常中学校の教諭、京都府尋常中学校の校長、高等師範学校教授を務めた。しかし、無罪とはなったものの教科書疑獄事件で逮捕され、その後のヨーロッパ視察から戻ると台湾総督府中学校長を務め、さらに松本中学校校長となるが、管理主義の行き過ぎから中学生たちに排斥運動を起こされて退職し、最後は神戸市の教育課長に就くなど、変転の多い人生を歩んだ[湯田 2014: 20-25]。

土井亀之進、「コメニウス氏の教育法」(『私立兵庫県教育会雑誌』, 第53号, 1894年1月。)*

クイックの『教育改革者』に依拠しつつ、コメニウスの教育史上の意義を強調したうえで、生涯を概観している。『教授大学』(『大教授学』)を著して「大いに世の高評を得」という記述は正確ではない。『大教授学』は、生前は教授の方針を導き出すための類比的方法が批判されたこともあり、それほど注目は得られなかった。他方、ハンガリーでの活動の記述は15に及ぶ著書を物したなど詳細で、『世界図絵』は『図絵世界』と訳されている。没年はやはり1671年となっている。

『大教授学』の意義を強調し、「この他の著書はことごとくこれが補助たるべきもの」とまで記し、その概略を記しているが、わずかな労力で愉快に着実にといった原則を分かりやすく説明し、コメニウスの教育改革の目的は教育をとおした平和の実現にあったことも触れられている。コメニウスが、教育を「国家の事業」と見なし、「宗教の勢力より分離せざるべからず」としたという指摘は正しいとはいえないが、性別に関わらない教育、教育における母語の重視、学校の設置と体系的な教育課程、感覚の訓練を重視した実物教授、自然に範を求めた教育

法といった『大教授学』の主要な論点をバランスよく簡潔に論じている。

土井亀之進(1866-没年の調べつかず)は東京師範学校に学び、石川県や兵庫県の師範学校で教鞭をとり、兵庫の柏原尋常中学校長を務め、その後、東京高等師範学校研究科に入学し、東京高等師範学校助教授、鳥取県師範学校校長を歴任した[白石 2014: 32, 34]。『実験普通教授学』(金港堂, 1897年)、『二宮尊徳翁報徳教の精神』(茗溪会, 1905年)等の著作がある。

『私立兵庫県教育会雑誌』には、前述の竹村のものにあわせ、わずか1年足らずの間に、コメニウスに関するオリジナルな論考が2編掲載されたことになる。

(続く。)

〔注〕

- (1) 大西巧は、『教育時論』を発行した開発社の経営体制について紹介しているが、ここでは湯本の顧問就任が1899年、社長就任が1900年としている[大西 2013: 166]。しかし、白石崇人によるインターネットサイト「大日本教育会・帝国教育会の群像」によれば、湯本の社長就任は1896年であり、本稿ではこちらを採用する。
- (2) 1878年出版の『内外教育新報』160号と161号には、城山尾三という人物による「フランシス・ベーコン氏学問の説」という訳文が掲載されている。『千葉教育会雑誌』の連載でもベーコンがあつかわれており、関連が想像される。しかし、この人物が他の教育雑誌に寄稿した記録は見つからず、また、ペンネームだったとも考えられる。

〔引用(参考)文献〕

*本文中で注記した文献のみを示す。

石橋哲成・清水徹編,「日本におけるペスタ

ロッチャー研究文献目録」，教育哲学会，『教育哲学研究』，第76号，1997年。

石田良平，「山縣悌三郎評伝」，明治文学会，『明治文学』，第4輯，1935年。

大西巧，「文部省『八年計画』の動向と報道（その1）～雑誌『教育時論』の報道を中心に～」，『太成学院大学紀要』，第15巻，2013年。

荻野富士夫，「山縣悌三郎小論」，山縣悌三郎，『児孫の為に余の生涯を語る——山縣悌三郎自伝——』，弘修社，1987年。

白石崇人，「明治期鳥取県教育会の結成と幹部」，『広島文教女子大学紀要』，第49号，2014年。

相馬伸一，『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀——』，九州大学出版会，2018年。

林三平，「『教育時論』における国民教育論の動向——明治教育政策史覚書（二）」，『青山學院女子短期大學紀要』，第22号，1968年。

山縣悌三郎，『児孫の為に余の生涯を語る——山縣悌三郎自伝——』，弘修社，1987年。

湯田拓史，「『文検合格者』のライフヒストリー——本莊太郎の経歴——」，神戸大学大学

院教育学研究科教育過程論・研究論研究室，『研究論叢』，第20号，2014年。

白石崇人，「大日本教育会・帝国教育会の群像」
（<https://sky.ap.teacup.com/siraisi/48.html>），
2019年10月7日閲覧。

〔謝辞〕

本稿を成すにあたって，佛教大学附属図書館の蔵書を利用した。また，佛教大学附属図書館参考調査係の尽力で，本稿で紹介した論考のコピーを入手した。同志社大学人文科学研究所の厚意により，『教師之友』所収の山縣悌三郎の肖像を掲載できた。お礼申し上げる。

〔付記〕

本研究は，科学研究費補助金・基盤研究（B）「教育思想史のメタヒストリー的研究」（17H02673）による研究成果の一環である。本研究の過程で明らかにできなかった点は本文中に記載しているが，ご教示をいただければ幸甚である。

（そうま しんいち 教育学科）

Abstract

This thesis is part of comprehensive survey of discourses on J.A. Comenius in prewar Japan. When national education system, one of the main agents of the formation of nation state was established in mid 19th-century Japan, Czech thinker in the 17th century, Comenius was introduced as a precursor of modern education. More detailed examination on the process is expected for the deeper understanding of the acceptance of Western education in Japan.

Through examining the books and magazines mainly concerning education published up to 1945, the author discovered more than 20 articles about Comenius, which have not been mentioned in the previous survey. In this series of theses, the author lists them up and reconsider the process in which the interpretation of Comenius changed and diversified. This thesis pays special attention to the textbooks of the history of education and of pedagogy and didactics, which were translated into Japanese from the latter half of 1880s to the 1890s, the activities of Teizaburo Yamagata (1859-1940), and other articles and books appeared before 1895.